

思えば九年目の故郷への帰還である。昭和十四年春三月国鉄粟津駅を発ち、そして再び粟津駅にと降り立ったのである。役場の方が家まで送ってくださったが、我が家の前に立って、今新しく、去りしあの日の家郷を出で発った思い出を顧みて、勇ましくまた雄々しくした決意のこと、言葉が思い出されて、勇ましくしたことが面映く思えてならない。苦渋に満ちた三年余の日々の回想は今走馬灯のごとく、人生の回り道をして家の玄関に帰り着いたのだった。

それは、実に回り道をたどった。肉親、親と子引き離れ、戦争下で四人兄弟の四人ともども、辛いこともあったが生還を成すことができた。さらに両親との再会の日を迎えることができた。老いし父母の顔、兄弟に妻、子供を抱いて混乱をも潜って生き抜き帰った苦難を察して、その責めを悔い、唇を咬みこらえ、溢れ出る涙を抑えられなかった。いつまでも体が引き締められ、固くしたが、その感激を生涯、生命のある限り忘れまじきと誓ったのである。

シベリアの地に過ごした日々を忘れない。生きてい

る限り、悔い、惜しみも、私たちが語り部として書いていくであろう。尊き日本人柱となった御霊に対し、私たちがその現実を共にした証を明らかに語るべきを責務と考えなければ。『今日も暮れ行く異国の丘に、友よ、辛かろう、切なかろう、我慢だ、待ってろ、嵐が過ぎりや、帰る日も来る、朝が来る』、いつまでも口ずさみ歌わん、「異国の丘」の歌を。心の引き締まる思いであるが、執念の帰還！であった。そして、美しい日本の山河、故郷のありて、我が命のここにありての幸福にも会えて。

三年間の抑留生活を顧みて

岩手県 大場 正志

ソ連軍の襲撃、そして出動、武装解除、抑留

昭和二十年八月八日は雨が降っており、未明の轟音に飛び起きたが、落雷と思い再びベッドに潜り込んだ。暫くして非常呼集のラッパで全員営庭に集合した。東

の空が幾分明るくなってきたところ、空襲であることを知らされた。B-29によるアメリカの襲撃だと思つたが、ソ連が不可侵条約を無視して突然攻撃してくるとは思いもしなかったので驚いた。

ヂャムスの満州独立工兵七三三部隊に配属、特別演習に参加するために、装備を整え十日に出発予定であった。

本隊は慌ただしく装備を整え翌朝出動したが、私どもは、営内の整理などで十三日の朝、今井軍曹を長に三十名、食糧などを馬の背に載せ出動した。途中、開拓団の婦女子たちが避難のため道路の両側を、南下していた。素足で子供を背負い、また一人の手を引き、着衣は破れ、気力もなく歩いており、哀願されたが手助けすることもできず、まるで地獄絵を見るごとく今でも脳裏に焼きついて離れない。

ソ連軍の空からの機銃による襲撃に見舞われ、広野において何の効果もないのに、本能的にススキが数本茂る陰に体を隠したのを覚えている。銃弾は数メートル離れたところを一線を引いたように土煙を上げ、ソ

連機は去った。

方正開拓団の村落入り口において武装解除を受けたのは八月二十三日であり、本隊は既に宿営テントを張り集結していた。私どもも合流した。

マンドリン（自動小銃）を肩にソ連兵が巡視している。翌日の昼ごろにテントの裏で銃声がした。驚いて外に出て見ると、短剣を抜きソ連兵に切りかかるうとして構えている上等兵、ソ連兵もマンドリンの引き手に指をかけ発砲、瞬時の出来事で、上等兵は十数発の弾を浴び倒れた。ソ連兵は顔色もなく慌てて逃走した。原田上等兵は一閃出身と聞くが、時計などの略奪が目に残り、許せなかったものと思う。目の前での出来事であった。

数日後、移動の命令が出た。ウラジオストックを経由して日本に帰るということがどこからともなく伝わってきた。長い道中となるので、各々乾パン、缶詰などの食糧に加え、医薬用のアルコール、ブドウ糖を背のうと雑のうに入るだけ詰め込み出発。スングリー（松花江）を船（水車付き）で下る。

想いを故郷に、乗船。私は船底の船室に十名ほど車座になり、早速雑のうから缶詰、アルコール、ブドウ糖を取り出し、水筒に紐をつけてスنگリ―の水を汲み、三種混合のにわか造りの酒を酌み交わし歓談、賑わっていた。しばらくして突然船が大きく揺れ出し、上部で騒ぎ出している。何事かとドアを開けて通路に出ると、階段から水が流れ込んできた。たちまち腰までの水となり、泳ぐようにして階段を上がり甲板に出た。船は沈没したのである。幸い船底が川底に達したので全員無事救出されたが、背のうも雑のうも全て失ってしまった。

ソ連領のレンスコエに上陸して数日間、満州からの戦利物質、主に大豆の荷役作業を強いられた。百キログラム入りの麻袋詰めであった。ヤポンスキー、トウキョウダモイ、列車の順番待ちというソ連軍の説明であった。いよいよ待望の列車に乗るときがきた。小踊りして喜んだ。列車が到着したが、貨物列車である身動きもとれないほどに押し込まれたが、日本に帰れるのだからと我慢した。夜行だからどこを走っている

のか見当もつかない。小窓から明かりが差してきた、夜明けだ。磁石を見ると西に向かっている。方向が違うことに気付いたが、だれも帰国を信じているので疑問を抱かない……。停車した駅はビラであった。全員に下車の命令が出た。殺風景な田舎町である。このときに初めて不審に思った。

この町から二十キロ離れた場所から列車に乗り換えるというので、荷物はマタオースに積み込み、徒歩で線路沿いに歩いた。次第に山が深くなってくる。マンドリンを肩にしたソ連兵の人数が多くなっている。皆、口数が少なくなっている。しかし帰国の希望は持ち続ける。

無情にも二十キロ地点で線路は行き止まりで、前方は深い森林の山ばかり。右手に、有刺鉄線が高さ五メートル、間隔五メートルで二重に張り巡らされた、二百五十メートルと百五十メートル、約三万五千平方メートルくらいの広さで、四隅には十メートルくらいの高さの監視塔があり、内部には百五十坪くらいのログ方式の構造物が三棟あって、だれの目にも監獄である

ことがわかった。

私どもの編制梯団は一千人、独工七三三部隊牧村中尉隊長以下二百名、憲兵隊黒川准尉以下六十名、輜重隊などの混成で編制されていた。

ソ連軍の少佐、大尉、軍曹各一名、ほか下士官・兵二十名、全員柵内に集合。ソ連軍少佐、大尉の訓示があり、堀越さん（民間抑留者）の通訳で、この収容所はソ連軍の直轄で、第五三三労働大隊と称する森林木材の伐採及び搬出、積み出し作業に従事することを告げられた。

収容所の生活、作業状況

トウキョウダモイの夢は断たれた。初めて見るメートル七十センチ二メートルくらいの両方に引手のある二人引き鋸、丸太を移動するトビ口、斧等の伐採に必要な道具が運び込まれた。

早速、兵舎の構築に取り掛かる。地上の構造物と違い、地盤を幅七メートル奥行き六十メートルを八十センチ掘り下げ、両側に二・二メートルとり、中間の二・六メートルを更に一メートル掘り下げて通路とし、

その中間に太い丸太の柱を建て丸太の梁を通し、地盤から通梁に末口十センチくらいの丸太を末口、元口と交互に屋根状に並べ、ススキなどの乾草を敷き、その上に三十センチくらい一面に土を盛り屋根は完成である。両面の二・二メートルにも末口十センチを交互に敷き並べて、一〇二メートルの木綿の袋を各自一枚配られ、これに乾草を詰め込んでベッドにした。一棟百名単位で十棟構築した。

十月も下旬となり寒さが増してくる。ドラム缶を一カ所に暖房用として設けることを許された。照明はソーセージなどの空缶を利用、布を縄状にして豆油を使用した。准尉以上は十名くらいで、将校室は地上に口グ方式で新築し、寝台は十センチほどの丸太で個々に作った。

武装解除前の軍隊同様、階級章もそのまま、将校当番もついていた。兵舎（ゼベランカ）も完成し、いよいよ本格的な作業に取り組むのだが、何しろ初めての二人引きの鋸、人跡未踏の原始林で赤松、シラカバ、シナなどの大木である。倒そうとする方向に倒れない。

長さ二メートルに切り落とすのに鋸が動かなくなる。

斜面を転がし土場までの中出しがとんでもない方向に転がってゆく。一人のノルマが四立方メートルと記憶しているが、検査は土場で受ける。一組が五名であったと思う。土場から伐採の場所までの登りが疲労を増大させた。マンドリンを肩にソ連兵のブイストラ、ブイストラ、ダワイ、ラポーターで追い立てられる。毎日、伐採場までの距離に一時間くらい要した。

食事の、スープに豆類の給食にはまいったものである。食器がわりにソーセージの缶を利用したが、豆が缶の底に一重に並ぶ程度で、サラサラの塩汁で黒パンが百グラムほどだけである。豆類の給食が半月も続くと顔がむくんで、目に生気を失いかける人が増えてくる。野草の生えている時期に多くなる。イラ草、カンショなどを摘んで飯ゴウで煮て、給食の豆汁に入れ具を多くし満腹感を得るのである。顔がむくんで太った感じの人が日ごとに頬が落ちてくると、死期が迫っているようであった。このような状態になっても休むことができない。七、八カ月くらいは日本の軍医中尉、

平川准尉が医務室を担当しており練兵休も比較的容易であったが、九月ごろソ連軍の女医が赴任して以来、厳しく容易でなかった。栄養失調などで望郷の念を抱きながら不幸にして死亡されると、慰霊室があり、食器に盛られた一膳飯を供えるが、いつのまにか供物の一膳飯がなくなっている。こんな状況はいつものことで、抵抗を覚えなくなった。

過酷な労働に耐え切れず亡くなられた戦友は、川向かいの俗に馬屋と呼んでいたシラカバ林に埋葬された。だれも野辺の送りに立ち会うこともなく、毛布に巻かれ、馬が引く木ゾリで墓地に運ばれた。

冬季は現場に向かう道中、お互いに顔を見合い、鼻が白くなつてないかを注意し合つて、凍傷にならないようにした。だれも無口である。足をすべらせて体のバランスをくずし、仰向けに倒れ頭を打つと脳振盪状態になり、その後言語障害を併発して全く話がなくなる。二十人くらいに達したと思う。初年度の冬、この時期に言語障害患者を含む六十名くらい、ピロビジャンの病院に入院のため収容所を去った。

二十一年八月ごろに私は盲腸炎に襲われた。医療設備のない収容所にて死を待つしか手の施しようがなかったと思いますが、平川准尉殿の懸命な看病のお陰で、意識不明から一週間して気がついたときは、丸太造りの寝台に手を縛られており、腹部にゴム手袋に水を詰め水のう代わりに三個吊り下げてあった。夏季で、橋桁の下を掘っていたものであり、また、暴れて手の付けようがなく縛られたことを伺い、感激しました。奇跡的に助かったことは生涯忘れることができない。

栄養失調などによる病人が多くラーゲルの総合ノルマが落ちてくると、ソ連軍のマイヨールが来る。キャピタンが将校を集めてノルマの達成を激しい口調で命じている。何しろ食糧が満足なものではない上、輸送途中に横流しがあり正規の割当量に達していない（ソ連自体の食糧事情が良くなかった）。

マタオース（ディーゼルカー）に土場からの積み込み作業も、伐採作業と同様、過酷な労働などと言うより非道なものである。皆、無口になってしまった。マホルカの分配が時々あるが、もちろん不十分なので、

松葉、ヨモギの葉などをタバコ代わりに吹かし、気をまぎらわしたものである。一番の貴重品は塩であった。タバコを吸わない者は塩と交換した。

冬が終わり、春が訪れるころになると赤蛙が群生する。これが不足しているタンパク源となる。皮を剥ぎ、針金に足を通しドラム缶のストープに幾重にも巻くと、焼き鳥ならぬ焼きガエルとなり、野草などと混ぜて空腹を補うのである。便所は、ゼブランカから百メートルくらい離れたところに大きい穴を掘り、丸太を組み渡したもので、冬季は排便された物が棒状に凍結し、丸太などで突き倒さなければ使用できなかった。

農場における生活と作業

第五三労働大隊に一般人が抑留され、最年少者で粟倉君（十八歳）がいた。小柄で童顔であった。私は百七十センチ、体重八十キロと大きい方であったが、多分童顔に類する方であったのか、多少露語を読めたためか、経緯のほどはいまだ分からないが、伐採作業、積み込み作業に従事したのは短期間であった。営内関係の雑用、糧秣受領など、営門も自由に出入りが可能

であつた。ソ連軍のキャピタンや兵士まで私は俗稱ワーシヤと呼ばれていた。

盲腸炎が落ち着いて一カ月くらいして、十キロ地点にあるソフオーズ（国営）系の農場に田口兵長以下八人が派遣された。三十平方メートルくらいの宿舎があり、農場の就労者の住宅二世帯、畜舎が五百平方メートル二棟、牛三十頭、羊が五十頭、豚が百頭くらいおり、農場は二キロ離れたところに五ヘクタールくらいあつた。トマト、キュウリ、ジャガイモなどを栽培しており、通勤作業員が十名ほどおり、ソ連兵の監視もない。責任者はニコライという五十歳くらいで、口はうるさいが人柄はよさそうであつた。ここでも私はワーシヤと呼ばれていた。

ピラ町にあるソフオーズの事務所に、一人で馬に乗って書類を届けたり連絡などで何度も往復したものである。時折遅くなり夜になることも度々で、途中に民家など全くない。マタオースの線路道で狼が出没する。馬は敏感で、狼を察知すると前にも後ろにも動かない。対処策は聞いていたので、パピロス（紙巻タバコ）に

火をつけて狼の立ち去るのを待つほか方法がない。狼が去ると馬は動き出す。このようなことは度々であつたので次第になれてしまう。しかし恐ろしいことには変わりがなかった。

十二キロ地点に五三三大隊の憲兵派遣分隊三十人が馬を使って作業をしていたが、詳細な内容は分らない。ここから衰弱した馬、怪我をした馬が毎月二、三頭、養豚用の餌として回送されてくる。私どもと同様に満州から連行され、酷使され、使えなくなると哀れなものである。屠殺から解体などが私どもの作業であるが、だれも経験したことがない。衰弱しているとはいえ馬である。思案の末、前足、後ろ足に蛇口の付いたロープを輪にしてロープを引くと、二本の足が一つになり馬が転倒する。ロープを杭に縛り、頭を押さえ、刃渡り二十センチの両刃の小刀で頸動脈を切断、ドクドクと流れる血をバケツに受ける。残酷な方法である。断末魔に縛りつけられている足で立ち上がりうと懸命にもがくが、コトされる。足首の間接部から皮を剥ぎ解体となる。匂いが鼻について食事でも喉を通らないが、

慣れとは恐ろしいもので、肉を焼き食べながらも解
体ができるもので、一週間、馬肉を食べ続けるとアゴ
が疲れてくるものだ。毎日山に登り、伐採、積み出し
を強いられ、空腹を満たすのに野草を食べ、栄養欠乏
症にて望郷の念を抱きながら亡くなった戦友に、申し
訳なく思った。

ソ連人にとって豚の脂肪は貴重なもので、あぶら身
の構成を多くする目的から、燕麥、コーリヤン、ジャ
ガイモなど、抑留者の給食を上回る物を豚の餌にして
いる。牛は搾乳用として飼っている。羊は毛を刈り、
出荷していた。農場のトマト、キュウリなどは、水漬
けのようにしてタルに漬け込み出荷していたが、酸味
の多いものである。ジャガイモはソ連で欠くことの
きない主食に次ぐもので、マタイ詰めで出荷した。

冬のある日、気温は零下二〇〜三〇度くらいであつ
た朝の九時ごろ、住宅に住むナターシャの家に呼ばれ、
朝食を御馳走してくれた。このとき、ホーロー引きの
カップに酒をついでくれた。一口飲んでくると喉が焼
けつくほどの強いもので、ウォッカである。油物をつ

まみながら飲み干したが、一日中体がポカポカして寒
気を感じなかった。二十歳前後の女の子が数人いたが、
食ありても環境が伴わないと、異性を意識するような
ことは不思議に全くなかった。

この農場での一年半を超える生活に終わりがきた。
ニコライが全員を集め、私どもには労をねぎらい、二
〜三カ月してトウキョウダモイだ、元気で帰るように
と励ましてくれた。通勤作業員も皆揃って見送つてく
れたことが印象に残っている。

再び収容所に

農場に派遣されるまではシラミが発生して悩まされ
た。毛糸の防寒頭巾の編み目に、下着の縫い目返しな
どに巣窟しており、慣れてしまうと気にならなくなつ
たが、就寝後しばらくしてシラミが異常に体に付いて
くる。気がついて隣を見ると、戦友が死んでいる。全
く苦しむこともなく、シラミの移動が死を報じること
を知った。

二十三年春に、ラーゲルに一年数カ月ぶりに戻つて
驚いた。人数が半減している。入院、死亡などで減少

したものである。反面、以前と比較して明るさを感じた。給食も米が入り好転している。階級章もつけていない。散髪室もあり、遠藤さんが担当している。洗濯場、浴場もできていた。民主化運動が盛んになっていた。日本新聞が壁新聞の掲示板に張られ、日ごとに民主化運動が激しくなってくる。委員長に木村さんが選任されていた。私も反動分子として二回ほどツルシアゲを受けたが、何ら反感を抱いていない。デモンストレーション的なものであったと記憶している。

収容所の内部もダモイトウキョウの空気が色濃く漂う。半信半疑で期待感を持ちながらも、半面素直に受け入れ難い面もあった。トウキョウダモイで最初に貨物列車に乗って、すでに三年も経っているから……。

待望の帰国

待望の帰国の日がきた。日誌、書面など一切持ち帰ることを禁止された。違反した者は残留のうえ別の収容所に転送するという通達があり、住所録その他記録したノートなど、すべて焼却処分した。

ナホトカを経由し、船で舞鶴に上陸し日本の土を踏

んだ時の記憶が、なぜか思い浮かばない。残暑の厳しい日であった、代々木の共産党本部に押しかけた人が多かった、と思う。

抑留されて以来五十年経ち、収容所においてお世話になり、奇跡的に一命を救って頂いた平川准尉殿の消息も不明のままで、承るところによると、私の息子と同じ歳の息子さんがおられることを他の人から聞かされた。牧村中尉、大塚少尉、大山准尉、太田准尉、また北海道出身の糸田清さん、門脇さん、委員長の木村さん、皆さんがお元気であれば是非お会いしたいものです。

一年半くらい前にロシア少女歌劇団が当市教育委員会主催で公演があり、子供たちをホームステイで二名（十五才）、私の孫も女の子ですので女の子を引き受けましたが、とても素直で、家族同様、楽しく久しぶりにロシア語で語り合いましたが、帰る際には妻と娘などと抱き合って別れを惜しんでいました。

ロシアの国内情勢が安定し国交の回復が望まれるところで、いまだ凍土に眠る五三三労働大隊の戦友の遺

骨は収集されていないのではないかと心を痛めております。私の記憶では、一緒に帰還し、舞鶴に上陸したのは四六七名であったと思いますが、五百余名について、死亡、入院などで、詳細は残念ながら分らない。

【執筆者の紹介】

住所 岩手県宮古市津軽石一四―一八―一

入隊前の経歴 工業専門学校在籍 南満州鉄道在職

主な軍歴 満州独立工兵七三三部隊 四十一日間

引揚後の職歴 昭和二十四年四月 三菱金属鉱業株式

会社入社

(岩手県 田辺 壮久)

繰り上げ徴兵検査で抑留者

岩手県 佐藤 欽 一

大正十四年九月五日、岩手県盛岡に生まれる。

昭和十九年一月二十四日、釜石駅車号掛を命ずる辞令を受け、釜石製鉄所にて生産される鉱石、鋼材の輸送に従事していましたが、その年、繰り上げ徴兵検査(十九歳)が行われ、現役兵と認定され、いつ召集令状がくるか緊張の毎日でした。

明けて昭和二十年二月、弘前東部五十七部隊に二月十日十時までに入隊せよとの令状を受け、二月九日、吹雪の中を盛岡駅発、青森経由・弘前へ。十分時間間に合うはずが、列車は青森操車場より進むことができず、やむを得ず車中に一泊するはめに。あまりの寒さに車内で新聞紙を燃やし暖をとる者もあり、翌朝弘前駅に到着したときは十時過ぎ、駅前より全力疾走で部隊へ。何とか初年兵としての生活が始まりました。